［第７回日本言語文化学研究会発表要旨］

中上級日本語学習者の文章表現の一分析

田代　ひとみ

（1993年12月４日発表）

Ⅰ．はじめに

日本語学習者の文章は、学習のレベルが上がるにつれて語彙や文型が豊かになり、複雑なことが表現されるようになるが、同時にわかりにくい点、不自然な点もみられるようになる。本研究では、学習者と日本語母語話者の文章を比較することにより、これらの点を具体的に解明することを目的とする。

Ⅱ．調査方法

セリフのない10コマの漫画（この調査のため作成したもの）を中上級の中国語母語話者、韓国語母語話者及び日本語母語話者各30名、計90名に見せ、そのストーリーを 300字程度の日本語の文章で説明することを指示した（時間は学習者40分、日本語話者20分）。学習者には日本語能力をはかるクローズ・テストも同時に行ない、その成績や日本語能力試験の成績、学習歴等の調査にもとづいて日本語能力が一定のレベルになるようにした。

Ⅲ．資料の分析

１．文章・文の全体的特徴

中国語話者は日本語話者に比べて文章全体が長く、日本語話者より多くの文で表現していた。一文あたりの長さは短く、節（クローズ）の数はやや少なめである。韓国語話者は日本語話者とほぼ同程度の長さの文章をやや少ない数の文で表現しているが、一文あたりの長さはやや長く、節の数が多い（次頁の表参照）。しかし、わかりにくさの原因として予測していた一文の長さに関しては、有意差は出なかった。

「情報の言及」（この漫画を説明するため用いられていた情報を29の要素に分け、それぞれの被調査者の言及を調べる）を比較すると、必要な要素については日本語話者、学習者とも20名以上が言及している。学習者もここで調査したレベルになると、文体、語彙などの誤用はあるものの、時間をかければ日本語話者とほぼ同じように必要な情報が言及できるという結果が出た。

	日本語話者	中国語話者	韓国語話者
平均文節数（文章全体の長さ）	72.83	84.00	70.70
平均文数（一文章中の文の数）	7.43	10.20	6.86
一文の文節数の平均（一文の長さ）	10.23	8.80	11.63
一文の節の数の平均	2.89	2.74	3.55

2．接続の表現

1)接続助詞（「連用接続」を含む）・接続助詞的機能をもつ語句

添加では、日本語話者は「て」(32.4%) と「連用接続」(27.7%) が多く使用されているが、中国語話者は、「て」(41.3%) の割合が高く、「連用接続」(2.9%)がかなり低い。韓国語話者は「て」(35.2%) 、「連用接続」(11.1%) と中国語話者に比べれば日本語話者に近いが、「て」の割合はやはりやや高い。

逆接では、日本語話者、中国語話者、韓国語話者とも大きな相違はなかった。

順接（因果関係）では、日本語話者が「ので」(5.5%)、「て」(3.5%)であるのに対し、中国語話者は「て」(9.8%)、「から」(5.2%)、韓国語話者は「て」(8.0%)「ので」(7.2%)という順序になる。

同列では、日本語話者が「ながら」(4.3%)、「て」(1.2%)であるのに対し、中国語話者が「て」(9.5%)、「ながら」(5.0%)、韓国語話者が「ながら」(7.2%)、「て」(5.0%)という順になる。

それぞれの機能の「て」全てを合計した割合をみると、日本語話者が38.7% 、中国語話者64.3% 、韓国語話者 51.3%となり、本研究では学習者の接続助詞類で、「て」の占める割合が高いという傾向がでた（%の数字は各母国話者30名の全使用例をそれぞれ100%として出したものである）。

2)接続詞・接続詞的機能をもつ語句

接続詞類の使用は全体では、日本…全32例、中国…全45例、韓国…全43例と

なり、学習者のほうが日本語話者より多かった。

日本語話者は、逆接を多く使用し、添加、順接因果はあまりみられない。中国語話者も逆接がもっとも多いが、添加、順接因果も多くみられる。韓国語話者は順接因果、逆接が同じ程度みられ、同列の「結局」も多いという結果になった。

3．視点の問題

視点とは、ある事実を書き手が述べる際に、だれを見ているか、どこから見ているかという問題である。これを動作主体や授受表現「もらう・くれる・～てくれる等」、受身・使役（使役的意味をもつ他動詞を含む）の表現、人・物の移動（複合動詞の使用）「行く、来る、～ていく、～てくる」を手がかりに分析した。その結果、日本語話者には、主人公の視点からみた表現が多いが、学習者、特に中国語話者には視点の移動が多いという傾向が出た。

Ⅳ．まとめと今後の課題

学習者の文章表現の不自然さ、わかりにくさの原因の１つには、前件・後件の内容次第で意味が多様に生じる「て」の接続の多用が考えられる。「て」の接続にはさまざまな制約があるが、学習者は不適切な主語交替をしたり、長い文の中に「て」を多用することにより文を不明瞭にしてしまう傾向がみられた。

今後は、視点の問題をさらに詳しく分析すること、接続表現のなかで誤用とみられるものの割合をみること、学習者の母語の影響を調べることを課題としたい。

［主な参考文献］

市川孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版
久野暲(1978)『談話の文法』大修館書店
宮地裕(1960)「文脈と文法」『講座解釈と文法７　現代文』明治書院
森田良行(1980)『基礎日本語２』角川書店
渡邊亜子(1993)「中・上級日本語学習者の談話展開－文の連接と『視点』からの考察－」　お茶の水女子大学修士論文

（お茶の水女子大学人間文化研究科比較文化学専攻１年）